

*NEWSLETTER*  
*of*  
*The Japanese Society for Applied Animal Behaviour*

*No. 13, August 2008*

◇ 展示動物の行動調査に関する体験型研修会のご案内

上野吉一（東山動植物園）

動物園を楽しむためにも、また彼らの生活を考えるためにも、観察することは重要なスキルです。環境エンリッチメントも、国内の動物園で広く使われるようになってきましたが、残念ながら、その進め方や評価の仕方が十分に理解されているとは言い難いのが現状です。そこで、より広く動物観察の方法を身につけてもらうために、本講習会を企画しました。市民、学生、動物園関係者といった多様な方々に、人数制限はありますが、参加していただきたいと考えております。

1. 日 時 平成 20 年 11 月 7 日 9 : 30 ~ 17 : 00
2. 会 場 名古屋市東山動物園
3. 主 催 応用動物行動学会
4. 共 催 名古屋市東山動物園、研究会「動物園の生物学」
5. 後 援 (社) 日本動物園水族館協会
6. 対 象 学生、動物園関係者、一般市民等（特に対象を限定しない：事前申込で定員を 50 名とする）
7. 参加費 無料（ただし、教材の実費を参加者負担とする可能性あり）
8. 内 容 環境エンリッチメントの計画、実施、評価のための基礎となる動物の行動調査の方法について、観察実習を交えて検討する。
9. プログラム
  - 9 : 30 ~ 9 : 45 受付
  - 9 : 45 ~ 10 : 00 開会  
開会挨拶  
スケジュールの説明
  - 10 : 00 ~ 10 : 45 環境エンリッチメントの定義、立案方法（上野：東山動物園）
  - 10 : 45 ~ 11 : 20 動物の行動調査法 総論（友永：京大・霊長研）
  - 11 : 20 ~ 12 : 00 動物の行動調査法 各論（森村：京大・野生生物）

12:00～13:00 休憩（昼食等）  
13:00～15:20 観察実習  
15:20～15:45 休息（実習場所から室内への移動等）  
15:45～16:45 観察データの処理、解析  
16:45～17:00 閉会  
閉会挨拶  
事務連絡

#### 10. 連絡先

東山動植物園 上野吉一  
e-mail: y\_ueno@rd.city.nagoya.lg.jp  
〒464-0804  
名古屋市千種区東山元町 3-70  
Tel: 052-782-2111 (代)

### ◇ 第 68 回日本動物心理学会のおしらせ

シンポジウム担当 青山 真人（宇都宮大）

来る 9 月 13 日（土）～15 日（祝日）、常磐大学にて、第 68 回日本動物心理学会大会が開催されます。茨城大学の安江先生経由で、実行委員長である常磐大学の森山先生（3 月の大会では副実行委員長を務めて頂いております）から、お知らせを頂きました。会場の常磐大学は、3 月に 2008 年度春季研究発表会やシンポジウムを開催した場所でありま  
す。また、慶応大学の渡邊先生、京大霊長研の松沢先生など、本学会に関連が深い先生方がシンポジウムや講演をされるようです。

興味を持たれた方は（会員の皆様は興味を持たれること間違いありませんが・・・）、お誘い合わせの上、参加されますよう、お願い致します。

第 68 回日本動物心理学会大会のホームページ  
<http://www.tokiwa.ac.jp/~jsap2008/index.html>

### ◇ 書評：匂いによるコミュニケーションの世界—匂いの動物行動学—

（小山幸子著、フレグランスジャーナル社発行、2008 年）

上野吉一（東山動植物園）

嗅覚の研究は、視覚や聴覚に比べればはるかに遅れている。Buck と Axel によって 1991 年に、匂いの受容体が分子生物学的に捉えられたことを契機に、匂いの受容に関するメカニズムや神経生理学的なミクロなレベルでの研究が、90 年代以降急激にホットな話題とし

て扱われるようになった。しかし、匂いそのものが、動物の生活にどのような役割や効果を持っているのかという研究はほとんど、特に我が国においては進められてこなかった。その結果として、行動というマクロなレベルからの嗅覚に関する日本人研究者による書物は、片手でも数えることができる程度しかないといっても過言ではない。この意味だけでも、本書が出される意義は大きいと言える。

本書はそのサブタイトルにあるように、動物行動学を基軸として書かれたものである。1章では動物行動学(Ethology)の歴史がコンパクトにまとめられている。2章、3章では、匂いの研究の基本的知識となる、嗅覚の仕組みや匂いによる情報についてまとめられている。動物行動学として、嗅覚の研究を始めようとする初学者にとって、基本的知識を要領よくまとめられているこの第一部は有効だろう。

第二部では、ネズミを中心とし、魚類や鳥類、あるいはヒトまでも含め、匂いのコミュニケーションが論ぜられている。いずれの研究紹介も、精緻なデータにもとづくもので、また非常に的確に要領よくまとめられており、読むものにとりスムーズに頭に入ってくる。匂いという情報が、いかに多くの内容をもってヒトも含め動物たちに利用されているのかを知ることができる。

ただ、著者が書いているように、本書はAromo Research誌に連載された「匂いの動物行動学」という、一連の論文をまとめたものがベースとなっている。そのため、一つひとつはコンパクトにまとめられており、また上述のように興味が引かれものになっている。しかし、1つの書物として見た時、全体としての主張には今ひとつ満足に欠けるものがあるように感じる。はじめに筆者は「ヒトがどのように匂いをコミュニケーションに用いているのか、あるいはいないのかが解明されてくることで、ヒトとして、そして人としての人間に関してもさらに多くの洞察が加えられることを期待している」と書いている。この書物がヒトや人間を直接対象としているものではないことは明らかであるが、そこにどうつながろうと筆者は考えているのかが、もう少し明確にかつ強く示されれば、そうした筆者の気持ちをもっと読み取りやすくなったのではないかと考える。

また、本論の中で「フェロモン」という言葉が多用されている。哺乳類の匂い行動をフェロモンという言葉で捉えることは必ずしも容易ではない。この中でも扱われている「ブルース効果」は単純に匂いの機能としてではなく、学習が介在する現象である。そうするとフェロモンに与えられた本来の定義と齟齬が生じる。「リリーサー効果」、「プライマー効果」という点では確かに一致するように見えるが、匂いそのものの効果だけではない要因が含まれる可能性が否定できないのであれば、フェロモンと呼ぶのは難しいはずである。そうした議論は80年代にかなりされている。私も日本味と匂いの学会誌で論考している。あるいは、匂いに暴露されると急激にその匂いを感じなくなることは日常的に経験することだが、本書ではそれを「疲労」という言葉で捉えられている。しかし、嗅覚は感覚としてはそう簡単には疲労することはなく、ある特定の匂いに対し「順応」するということが確かめられている。嗅覚のこうした現象に言及する上では、「疲労」と「順応」は正確に使い分けする必要がある。

このように、本書は現象の捉え方やそれに対する用語論的扱いにおいて、いくつか重大な問題があるように見受けられる。しかし、最初に述べたように、行動学視点から匂いのコミュニケーションをまとめた和書は少ない。その意味で、本書は、そうした細々とした問題はあるとしても、十分にその意義は高いと思う。これから匂いの研究を始めようとする学生は是非とも一読をすることを薦めたい。

#### ◇ 学会内容変更の手続きについて

会員担当 瀬尾 哲也（帯広畜産大学）



転勤、進学、就職等に伴う住所、所属、メールアドレスの変更などがありましたら、応用動物行動学会ホームページ [http://karamatsu.shinshu-u.ac.jp/lab/ethology/jsaab\\_index.htm](http://karamatsu.shinshu-u.ac.jp/lab/ethology/jsaab_index.htm) から手続きをお願いいたします。不明な点がありましたら、[seo@obihiro.ac.jp](mailto:seo@obihiro.ac.jp) までお問い合わせください。

#### ◇ ホームページの更新について

通信担当 竹田 謙一（信州大学）

8月4日に学会ホームページ ([http://karamatsu.shinshu-u.ac.jp/lab/ethology/jsaab\\_index.htm](http://karamatsu.shinshu-u.ac.jp/lab/ethology/jsaab_index.htm)) 更新予定です。主な更新内容は以下のとおりです。

- ・学会誌 Animal Behaviour and Management 最新号目次
- ・動物園での行動観察勉強会のご案内

また、メールアドレスの変更や登録希望がございましたら、竹田([ktakeda@shinshu-u.ac.jp](mailto:ktakeda@shinshu-u.ac.jp)) までお知らせください。

#### ◇ 編集後記

暑中お見舞い申し上げます。7月中旬の猛暑から最近はやや小康状態が続いておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。今回のニュースレター No.13 では、秋に開催されます展示動物の行動観察研修会や日本動物心理学会の記事を中心にご案内させていただきました。前後しますが、8月5日から9日まで、アイルランドにおいて第42回国際応用動物行動学会 (ISAE) が開催されます。次号では ISAE 参加者の報告記事を中心に9月末ころ配信させていただきたいと思っております。また、会員の皆様からのニュースレター掲載希望情報も随時募集しておりますので、配信希望がございましたら、お気軽にご連絡ください。

(ニュースレター担当 小針 大助 : [kohari@mx.ibaraki.ac.jp](mailto:kohari@mx.ibaraki.ac.jp))